

天文学とプラネタリウム

第137回



今月のお題

月待講

9月9日、ネット中継イベントを実施します！



七夕、中秋の名月に続く天文な日として、月待講の復活はどうでしょう？



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

暑かった夏もすっかり昔、涼しい夜風が気持ちの良い季節になってきました。秋の天文イベントといえば、なんといっても中秋の名月でしょう。十五夜の月を眺めながら、お供えしたお団子をつまみ食いするのは、なかなか趣のあるものです。でも、最初にこんな楽しみ方を考え出した人は、どうやって周りを納得させたんでしょうね？秋の収穫に感謝してとかなんとか言いますが、月にお団子の組み合わせと収穫に感謝の関係は、こじつけレベルを超えての妥当性があるようには思えません。ああ、感受性の欠如。パレンタインも、恵方巻も、土用の丑の日も、いずれもマーケティングのために作られたイベントという側面があるものと思いますが、それでその日を楽しめるのならばそう悪いことではないでしょう。ならば、我々ももっとそういう日を積極的に提案していくのもありなのではないでしょうか。積極的に宇宙を楽しむ日を作り出すのです。

天文関連だと、例えば七夕や中秋の名月は現代でも通用するそのような日のひとつだと思いますが、それぞれ1年間に1回しかなく、ちよ

っと物足りない感じも否めません。もっと頻繁に宇宙を楽しむ日を作れないのでしょうか。実はあるんです、それにふさわしい日本の風習が。

月待信仰

それは月待信仰と呼ばれるもの。特定の月齢の日に仲間が集まり、飲食を共にした上で月に祈るという風習で、江戸時代に特に盛んに行われたそうです。二十三夜講と呼ばれる、下弦の月の頃に集まるものももっとも広く行われたのですが、これ、良くないですか？

現代風に翻訳すればこんな感じです。毎月、二十三夜の晩になると、三々五々、仕事を終えた人たちが六本木ヒルズの中にあるラウンジに集まり始めます。今日は二十三夜講の日。毎月、ゲストの天文学者を囲んでお酒や食事を楽しめます。ソムリエが選んでくれるお酒は、いつも月や星にちなんだおいしいお酒ばかり。なんだかふわふわした気持ちの中で、非日常の雰囲気になりながら、宇宙の話聞くのもまた楽しいものです。時間はあっという間に流れ、ふと気



東京の夜景を眼下に楽しみながら、月の出を待つのは贅沢な時間です。

がつけば、東の空には月が顔を覗かせます。それが終わりの合図。明日からの仕事に向けて気力を蓄え、それぞれが家路につくのです。

さすがに二十三夜の月だと月の出が遅いので、もうちょっと前の月齢が良いとは思いますが、風流な遊びとして現代に復活させるのはなかなかよさげな感じですね。妄想を実現するのが天プラの得意技。遠からず開催案内ができるよう、がんばってみたいと思います。